



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十一卷

河出書房版

目次

田山花袋

生……………
 24

田舎教師……………
 24

徳田秋聲

足跡……………
 25

解 説(片岡良一)……………
 25



田
山
花
袋

田 生
舍 教
師

『今晚嫁入があるツてな。』

『何處で?』

『すぐ此下の家で。』

『下の家ツて何處だい。』

『そら、あの酸漿^{はづさ}を鳴らして通る、白髪^{しろがみ}のお袋さんの居る家さ。』

『よく彼處では嫁入があるな。このお正月にもあつたぢやねえか……。それに、あのお袋さん病氣^{わづか}が悪くつてとうから臥^ふてるツて言ふぢやねえか。』

『お正月のは弟の嫁だアな。そら、ぢきあの裏に居らアな。色の白い肥つた、八丈の羽織などを着てよく通るぢやねえか。』

『今晚来るていのは、その兄貴の嫁さんだ。』

『兄貴の? さうか、毎日洋服を着て役所へ行く?』

『さうよ。優しい、人柄な、熊公のよく挽いて行く旦那だ。』

『あの旦那にや女房^{おんなばや}があつたぢやねえか。』

『なアに、あのお袋さんの氣に入らねえで、昨年^{こぞ}出してつたアな……。あのお袋さん、あれで中々難かしいから。』

『さうかな、優しいさうなお袋さんだが……。始中^{しうちゆう}終^{はつ}酸漿^{はづさ}を鳴らして、榮^{さか}爾^にして通るが……。』

『さうよ、鳥渡^{とりわた}見ると、人柄な好い婆様^{ばやう}だが、あれで中々豪氣^{ごうき}丈者^{ぢやうもの}だツて言ふから。』

と言ひ懸けて、植木職の定公は、ぢやぶくと手拭で顔を洗つた。早稻田に近い牛込の喜久井町柳の湯では今洋燈^{やうてい}が點いたばかり、戸外^{戸外}はまだ薄明るかつた。夕飯時の客は少く、三助は空いた桶をがたん／＼と流しの一隅に片寄せて行つた。八歳位の、年にしては丈の高い一人の子供が今し湯から上り懸けて頻りに身體を拭いて居たが、そ／＼と着物を着て、帶を巻附けて、戸を烈しく閉て出て行つた。

『今、出て行つたのが息子だアな。』

『さうかあれが……。』と相手は點頭^{うなづ}いて、『あの旦那にあんな大きな息子があるんか。』

『何でも先妻の子だツて言ふ話だ。』

『先妻ツて、此間^{こゝ}まで居たのは、まだ若かつたぢやねえか。』

『あの前の前の先妻の子だ。』

『や、それア大變だ。随分澤山な女房^{おんなばや}持ちだナ。』と顔を手

拭で撫で廻して、『女房もさう澤山持つたら好いだらうな。』
『本當よ、俺達のやうに、しつかりとこびりつかれて居ちや遣り切れねえ。偶にやぼつくり參つて後の若いのつてやうな幕も打つて見てえな。』と相腿を打つて笑つた。

客の無い廣い流しには、洋燈がぼんやりと點いて、岡湯の漲る音が靜かに聞える。女湯にも一人か二人の客らしい。

『ぢや、何うせ大年増だ。』

『それア當り前よ。』

『嫁入ッて聞くと、何だかかう自暴に氣が若くなるやうな心持がするが、大年増の、ひね旦那ちや始まらねえ。』

『別嬪だによ。』

『ちやらつぽこ言ひねえ、……知りも爲ねえ癖に。』

『だつて、あの家の隣の若夫婦の媒妁だつて言ふぜ。何でもあの若い上さんの友達だつて言ふから、滿更でもあるめえと思つてよ。』

『馬鹿言ひねえ、紺屋の上さんのやうな別嬪にも、己の噂のやうな友達が居らア。はッはッ。』

面白さうに二人は笑つた。

もう日は暮れた。客が一人入つて來た。

『入らつしやい。』といふ番臺の女の聲が高く四邊に響く。

戸外を荷馬車の通る音ががた／＼と聞える。五月は下旬、空氣の濕つぽい暖かな晩であつた。

二

柳の湯から少し行つて、通を曲ると、柴垣、枳殼垣、冠木門、庭樹の鬱蒼と茂つた古い蘗葺の家が一軒、それからだらと下り坂になつた盆の底のやうな卑濕地には、早くも夜霧が闇に微白く靡いて居た。老いた蛙の聲が耳を聳するばかりに聞えて、雨催ひの空は暖かく、星の影は一つも見えない。この盆の底のやうな處は、曾てはさる大名の下邸の庭の泉水で、向うに靡く低い丘は立派な築山であつたといふ。潰れた邸の址は、久しく藪地になつて居て、其泉水の縁を繞つて早稲田南町に出る細い路は、惡戯をするものがあるのと、質の悪い野犬が居るのとで、日が暮れてからは女などは殆ど通らなかつた。かうして唯藪地にして置くのは惜しい、開墾して麥でも播かうと、ある百姓の老夫婦が思立つて一坪二厘の地代で其一隅を借りて、肥溜の小屋を造つたのは、それから餘程後であつた。日清戦争の少し前には、或山師が近郊の避暑地の流行から思附いて、見晴が好いのを利用して、築山の下に樹籬に小屋掛をして、細い灌などを落して、麥酒の醸を清水に浸したこともあつたが、二年と續かずして失敗して止してつた。原には春には野蒜、蒲公英、嫁菜などが出た。紙鳶のうなりも聞えた。通行する人は誰も好い惜しい地所だと思はぬは無いが、さりとて此廣い藪地に手を着けようとするもの

は無かつた。

處が、ある日突然大工の棟梁らしい男が羽織を着た且那らしい顔面と一緒に此原に来て、篠笹の藪地に頻りに繩を引き始めたが、二三日経つと鉦の音が珍しく聞え出して、二三人の大工の甲斐々々しい姿が其處に見えた。新しい木材の匂、鉦音が風に吹かれて四邊に散つた。で、原の中央に一軒、西北の一隅に二軒、新しい貸家が建てられて、原を往來する人は、其路の賑かになつたのを喜んだが、斜に貼られた貸家札は徒に雨風に吹曝されて、久しく住む人の影も見えなかつた。

それから一二年経つた。原の中央の家は少くとも借手が三度變つた。角にある老梅樹は三代將軍が鷹野の歸途、此大名の邸に御立寄になつた時、手づから植ゑられたもので、其下にある大きな花崗岩は、將軍が其時腰を懸けられたものださうだが、其梅樹は年々美しく花を着けて、路行く人々の袖に薫る。丁度春先のある暖かな日、目隠しに植ゑた檜、櫻、椎などの繁つた間に、簞笥やら長持やら本箱やら勝手道具やら竈やらを載せた引越車が三臺ほど引込まれてあつた。一月ほど空いて居た此家は新に主を得たのである。半白の、中背の、人柄な母親が先に立つて働いて、嫁らしい赤い手絡を掛けた若い丸髷が、頻りに井戸に出て水を汲んだ。主人は髯の濃い三十二三の柔和な男で、二十四五の、髪の長い色の蒼白い神

經質らしい弟と一緒に、簞笥、本箱などを室内に運んだ。

喜久井町から早稻田の通は、まだ其頃は淋しかつた。家屋の絶間には、麥や菜の畑が青々として、雲雀が鳴いて居た。引越蕎麥は早稻田の穴八幡の前の蕎麥屋が配つた。四疊半の離座敷を弟は自分の書齋にして、壁に面して机を据ゑて、前硝子の本箱を其傍に置いた。雜誌新刊物などの中に洋書が五六冊交つて入つて居た。一間の押入の中には上に寢道具、下には古雜誌や古原稿を荒縄で一括りにからげたのを、其儘無造作に投り込んだ。

主人は最後に植木を庭に移した。亡父が生前に此上なく愛して居たといふので、態々田舎から携へて來た大神樂といふ椿は、都會生活の度々の移轉に、生長する暇もなく、葉も枝も萎れ果てて居た。其他躑躅、萩、寒竹、毘沙門の縁日で買つた木犀——尻を端折つて、一生懸命に鍬で土を掘つて居る主人の姿は、夕暮の空氣の中にはつきりと見えた。そして其時五歳になる先妻の男の兒は何か無邪氣なことを言ひながら、はつちやけて庭を遊び廻つて居た。で、それが済むと、主人は縁側に置いた釘箱と金槌とを取つて、小さな門に、古びた郵便受函と標札とを打つた。標札には禿びた字で——「吉田寓」

風の吹く日は裏の雨戸は明けられなかつた。八疊二間續き、玄關が三疊、古簞笥の上に佛壇が置かれて、其上に神棚

があつた。主人は何時と同じ背廣の洋服を着て、原の路を丘と田との間に添つて通つて、淡竹の大藪の彼方へてく／＼と出て行く。そして五時過には、夕日に向つて其同じ道を歸つて来るが、其頃は丸鬚姿の若い細君が屹度其道に向いた井戸端で頻りに米を磨いで居た。弟は四疊半の書齋に籠つて、終日書を讀んだり、筆を執つたり、所謂神來の想を得る爲めの樂寢に耽つたりして居た。渠は戀と文學とを一緒にして、そして美しい夢を見て居る青年の群であつた。時々同じ夥伴の友人が來て、文學談から宗教談、難かしい人生問題、其論争の聲は垣の外を行く人々の足を停めた。

母親は其頃五十一二であつた。士族が祿を失つた維新前後の浮世の大波を被きながら、早くから夫に別れて難かしい舅姑の世話、多い子供等の教育、忍耐に忍耐した不滿の情は今に及んで、一種險しい荒涼たる性格を形づくつた。望を懸けた子供等がひとり役所の下級官吏、ひとりは物の役に立たぬ空想家、ひとりの娘は田舎の貧しい機屋の細君、息子共が成長くなつて東京に出られるやうになつたらと、いろ／＼に樂んだ美しい空想は片端から脆くも崩れて、嫁は輝だらけの手、世の常の大きな足、それにちやほやする長男を見ると、むしろよくしやせずには居られなかつた。で、家庭の衝突を重ねて、初めの嫁は初兒の産褥で倒れて了つた。

其初兒を母親は抱癪をして育てた。

上顎の齒が大方抜けて、何だか緊くない處から、酸漿を喝らすのが習慣になつて、後には丹波酸漿の木を庭に植ゑた。八月には鈴生になつた其酸漿の赤い色が美しく庭を飾つた。

其頃、日曜日には、母親は屹度玄關の三疊の高窓から顔を出して喜久井町の通に出るだら／＼坂を眺めて居た。やがて靴の音劔の音と一緒に背の高い活潑な士官候補生の姿が顯れる。『そら秀雄が來た、』といふ。其母親の顔には喜悅が溢れ渡つた。母親の最後の希望は此三男の勇しい軍人姿に懸けられてあるので、自ら呪ひ自ら傷けた荒涼たる生活に、糧でもあり花でもあるのは此唯一の士官候補生であつた。で、日曜日のみは賑かに樂しげに送られた。餅菓子、果物、蕎麥、鰻飯の旨いのが馬場下にあるのを、母親は自ら使に行つて買つた。快活なる軍隊生活、勇しい練兵と術科、家庭の小さい紛紜などは何うでも好いと謂つた風な物語は、單に母親の荒涼たる心を暖めるばかりではなかつた。淋しい暗い家庭に、一週一度の此光明を誰も皆な待つた。

『お前が來て呉れると、母様の機嫌が丸で變るんだから……日曜には成るべく來るやうにして呉れ。』などと主人の兄が謂ふと、

『矢張、母様は難かしいかナア、何うも困るナア。何故彼様になつちやつたか。本當に家の揉める位つまらんことはない。』

平氣な調子だ。

そして空想家の兄の書齋に入つて行つては、『銃ちゃん(兄さんとは決して言はなかつた)何か面白い小説本は無いかな。』と言つて、其仲兄が髪を長く、色を青く、神經性な瘦せた顔をして、一生懸命にセンチメンタルな冗漫な誇張した長い憧憬小説を書いて居る傍に寝そべつて、雜誌やら小説やらを無造作にひつくり返して、面白さうなものがあると、講談であらうが、探偵物であらうが、鷗外露伴のむづかしい小説であらうが、そんな區別には頓着せず、すぐ讀耽る。

銃之助の抱負では、軍人などを豪いと思つて居なかつた。

今に見て居れ、傑作を作つて天下を震撼させて呉れる。不朽の名を明治文學史上に刻んで呉れる。かう思つて居る。けれど軍人の暢氣な快活な生々した生活は羨しかつた。暗い家庭に居て、朝から晩まで痛い小さい衝突に神經を昂らせて、其學句に辛い／＼机の上の煩悶、生理上の烈しい壓迫も愈々其頭腦を不健全にした。憂鬱な我儘な正直な臆病な性質を渠は最も多く其母親の血から承け繼いで居たのだ。

母親の憂鬱な顔の一線の動いたのにも渠はすぐ胸を曇らせ

士官候補生の制服、軍帽、短い劍——その暢氣な生活が堪らなく羨しい。門限が來ると言ふので、次の日曜を約して、夕暮に其弟が歸つて行く。母親は玄關の高窓から其後姿を見

送る。渠は書齋の前の障子を明けて、だら／＼坂を急いで上つて行くのを見て居る。軍隊の生活、寢臺の上から落ちた話、消燈喇叭が鳴つた後も西洋蠟燭をこつそり點けて勉強するといふ話、さまざまの話が思出されて胸が一杯になる。郊外の秋の日、美しい日の光に浴して、兵士の群が彼處に一團、此處に一團、餘念なく演習を遣つて居るのを見て、かうした無邪氣な快活な生もあるのだと思つて、熱い涙を流したことをも思出した。

日の暮れる頃、わアーツわアーツと言ふ聲が聞える。これは士官學校で、生徒が食後の運動の爲め、號令の練習を遣るのである。其頃初めて牛込に住んだ人々は、必ず一度は此聲の何なるかに驚く。現に此一家族も田舎から出た時には其耳を疑つたのである。此聲の聞える頃、漸く洋燈が光を放つた頃、其時分が一番怪しく一番暗かつた。生の荒涼から覺えた晩酌を母親はいつも遣るので、難かしい顔は既に赤くなつて居る。皮肉な我儘な道理も何も無い小言が、平生沈鬱な母親の口から逆るやうに出て、其矢面に主人と若い嫁とが立たなければならなかつた。いつものこととて大抵は柳に受けて聞流しては居るが、其皮肉がいかにも勁烈なので、時にはいかに優しい主人も黙つて居られなくなる。田舎出の若い細君は飯も咽喉に通らぬといふ風で、勝手へ立つて行つて、顔を障子に押附けて泣くことなどもあつた。

暗い洋燈の下に長火鉢、膳、碗、鍋、處々破れた障子、佛壇も神棚も總て闇で、嫁の持つて來た前桐の安簞笥のみが白く室の中に目立つて見える。銃之助はこれが始まると、そゝくさと急いで飯を濟して了つて、すつと立つて書齋に入つて了ふ。兄や嫂の身にしては、何とか母親をなだめて呉れても好さうに思はれるが、かれの神經質では、醜い其光景に堪へ難いので、暗い洋燈の光と母親の赤い皷しい顔を見ると、此世も盡くるかとばかり辛く悲しかつたのだ。

机の前に坐つて、

『傑作！ 傑作を。』と心に叫んだ。

時はさうして居る中にも經つた。兄の毎日の役所勤め、弟の絶えざる文學上の勞作、若い細君は難かしい姑に睨まれながら、朝夕の炊事、汚れ物の洗濯、酒屋、肴屋、豆腐屋、八百屋の中親爺は落合あたりから車を挽いて毎朝遣つて來る。小松菜、蕪根、慈姑、葱、甘薯、秋から冬に懸けては、漬菜や干大根を山のやうに積んで、老母の裁縫をして居る縁側に來て、廉く負けるからと言つて二樽ほど賣つた。

山の手も段々と開けた。鉦の音が到る處に聞えて、新建の貸家が日増しに殖える。原ではだら／＼坂の西の臺地に二階造の和洋折衷の大きな家屋、續いて其上に、茅葺屋根の寺のやうな家屋が立てられた。其長い縁側には、綺麗な娘が派手な帶を締めて、色白の顔を浮彫のやうに見せて、四邊の好眺

望を眺めて居た。

隣の藪地が五千坪ほど切開かれて、やがて小さい三間位の家屋が建つた。小さな門、小さな庭、小さな入口、何ういふ人が入ることかと評判されて居たが、母親がある日銃之助に、『お前のお隣には別嬪さんが來たね。』と笑ひながら言つた。母親は今少し前、色の白い、二十五六の、髪を花月巻に結つた女が其處から出て來るのを見たのである。

其翌日引越車が三臺來た。簞笥と本箱とが殊に目に立つた。越して來たのは、早稻田の法料に籍を置いて居る男で、昨年まで地方で基督教の傳道に従事して居たが、生活問題に不安を感じ始めて、新に法律を學ぶ爲め、質素な生活を此處に夫婦して始めるのであるといふことが段々解つた。細君は小づくりな、色の白い、かなりな美人で、子が無い故か、すべてが年に較べて派手づくりで、赤い帶揚げにメリンスの半襟、顔にはいつも白粉をべつたりと附けて居た。前の井戸で一緒になるので、やがて懇意になつて其細君の母親だと謂ふ、人の好い眼の悪い老母が、折々吉田の家に訪ねて來た。

『あのお婆様には困るよ。話が長くつて、くどくつて、そしてながつちりだからねえ。あゝいふ用の無い閑人はあゝして居ても好いかも知れないけれど、私のやうに、嫁の世話から孫の世話まで爲なけりやならんものには、とても交際は出來ない。』などと吉田の老母は満ちて居たが、それでも時々はその

家に自ら出懸けて行つて、其老母よりも若い細君を相手に一時間も長話をして來ることなどもあつた。

あたりは益々開けて、新しい家屋は原を縁取つて幾軒か出來た。淋しかつた道にも往來が繁く、野犬が居たり、惡戯するものがあつたりした時代は何時のことかと思はれた。二階屋からは家の娘の弾く琴の音が聞え、近所の家からは軍人の細君らしい若い女が盛裝して出て來るやうになつた。

三年は経過した。

此間原の家では、家庭の衝突は同じく絶えなかつたが、前後に事件が二つ起つた。一つは三男の士官學校卒業の祝、一つは若い嫁の生兒の死に續いて起つた離縁騒ぎ。

弟の秀雄は優等で學校を卒業した。老母は一生の晴れだと言ふので、其卒業式には態々白襟の紋附を造つて、晴々しい氣色で列した。子息のことを人に誇るやうな甘い性質ではなかつたが、此時のみは逢ふ人々に其末子の成功と幸運とを語つた。秀雄は高崎の第十五聯隊から士官學校に入學したのであるが、丁度其時日清戦後の軍備擴張で、弘前の第八師團が新設されたので、急に第三十一聯隊附を命ぜられた。東京に居られぬのを母も當人も残念がつたが、何うすることも出来なかつた。新しい少尉の軍服、軍帽、目に眩するやうな立派な劔、非常な入費も戸主だからと言ふので、總領の兄は無理算段迄して調達して遣つた。そして其月の末には弘前に發つ

た。

若い嫁は其翌年の六月懷妊して、其翌々年三月男の子を産んだ。主人の喜悅は一通でなかつた。これで家庭もいくらか圓滿になるであらうと思つた。銑之助もさう思つた。ところが、四月のある朝、ゆくりなく其生兒の冷たくなつて居たのを發見した。父母の涙は盡きぬのに、間もなく離縁話が持上る。細君の實家の親戚からも強硬なる態度の談判が續く。其六月には、其細君の姿は遂に此原の家に見えなくなつて、井戸端には老母が桶を下げて水汲に出た。

丁度顔を合せた隣の細君が、

『お雪さん、何うか爲さいましたか。』と訊く。

『あれは一昨日實家に戻して了ひました。』

『おや、まア左様ですか。』と吃驚して、老母の顔を見て、『ちよつとも存じませんでした。此頃御見えにならないから、何うかなすつたかと存じて居りました……』

『馴れたものですから、あんな不束なものでも、成らうことなら置いて遣り度いと存じましたけれど……此間のやうな、人様にお話も出来ないやうなことで御座いますからねえ、いくら眠いからつて自分の子を……ねえ、貴方……』

『本當にねえ……』

と隣の細君は返事に困つた。

總領の兄は名は錦と言つた。明治十八年頃の書生立で、

下級官吏の生活と貧しい家の事情とが若い頃の功名の念をも銷磨し盡したといふ風。座敷にある古本箱の中の漢學、國學、歴史學の數多い書籍は、明かに其人の半生を語つて居た。机の上には塵が堆く、硯箱の蓋も滅多には取らうともせぬ此頃の狀態を見るにつけても、銑之助は家庭の爲めに犠牲になつた此兄の心を傷まずには居られなかつた。銑之助も秀雄も此兄の口からこそ功名の念を吹込まれ、人間としての理想をも教へられ、孤往獨邁の尊い精神をも鼓吹せられたのだ。早くして父を喪つた兄弟は此兄を師とも父とも頼んだのである。であるのに、一度世の中の實際に觸れて、氷の如く解け去つた其理想、其精神！ まだ世に出でぬ身の好くは解らぬが、銑之助は少くとも餘りにその腑甲斐の無いのを惜んだ。さうしてでなくては渡られぬ世の中なら、いつそ今の中に自殺して死んで仕舞ふ方が本望だとまで感情的に心中に絶叫したこともあつた。役所に出勤して、歸つて飯を食つて母親に小言を言はれて、妻と一緒に早く寐て、一月を一圓か二圓の小遣で満足して、偶に金が入ることがあればこつそり遊廊に出懸けるといふやうな平凡な生活にどうして甘んじて居ることが出来るかと疑つた。四疊半の書齋に閉籠つて空想にばかり耽つて居る渠には、人間の中年の平凡なる苦痛などは解らう筈がなかつた。

妻を離縁した後、主人はよく家を空けた。三晩ぐらゐ續け

て歸らぬこともあつた。丁度其頃或書肆の歴史編纂の手傳をして居たので、錢廻りは好かつたものと見える。母は半は憂ひ半は怒つた。歸つた顔を見ると安心はするが、羽織でも洋服でも、『何處の馬の骨が觸つたのだから解らん。』などと謂つて、碌々疊んで遣りもしない。時々機嫌を取る氣で、旨い西洋菓子などを買つて來ても、『そんな見え透いた御世辭の菓子などは食ふと口が汚れる。』と言つて手にも取らずに庭に捨てた。子息の心底から思つてする行爲も母の眼には通り一遍の御世辭で、『錄の猶撫摩は油斷がならん。腹では何を思つて居るか知れはしない。あんな腹の黒い男は澤山ないぞえ、銑なども用心しろ。』などと聞えるやうにつけ／＼言ふ。

後には馴染から手紙がよく來た。銑之助は初めは母に見せまいと思つて、自分で受取つて、こつそり兄の机の抽斗に入れて置いて遣つた。けれども其手紙がいかにも多い。日に二三通づゝ來る。で、或時、何んな事が書いてあるものかと思つて、自分の四疊半に持つて來て、所謂神聖な戀愛小説の書きかけの原稿の上で封を截つた。金釘の解らぬ字で、嬉しがらせの文句が一杯、別に、白い紙に墓に薄の生えた拙い繪がなすくつてあつて、恨めしい！ と書いてある。銑之助は女郎の手紙の殺風景なのに呆れざるを得なかつた。それからもう顧みようとしなかつた。兄は？ と見ると、兄も其手紙の封を截つたことは滅多に無い。机の抽斗は其手紙で一杯

になつた。

三

また一年経つた。

喜久井町の通にはミルクホールが出来た。畑を潰して、蕎麥屋、西洋菓子屋、米屋などが軒を並べた。原にはまた一軒新建の家屋が殖えた。二階屋の前の空地にも四間位の鳥渡した貸家が建てられて、新聞記者だといふ若い美しい細君を持つた人がすぐ入つた。原の家でも大なる變遷があつた。九月に次男の銑之助が四疊半の書齋から出て裏の三間の小さい家屋を借りた。十一月頃から、老母は兎角氣分がすぐれなかつたが、年を越すと段々容體が悪くなつて、醫師の口振では不治の病であるらしい。一月には銑之助は足元から鳥の立つやうに急に思立つて、自ら進んで妻を買つた。花は咲いて散つた。老母の容體は益々悪い。親戚から娘が手傳に來る。主人の獨身を目的に、旨く行つたら後添にならうといふ特志の中年の下婢が、白粉をべたくと顔に塗附ける。裏の家からは新しい嫁が毎日絲織の着物に黄八丈の羽織といふ若々しい扮装で見舞に來る。別の家かと思はれるやうに賑かになつた。

今度は隣の夫婦の媒妁で主人の嫁が來るといふ。

四

其夜原の家の高窓は、夜霧の微白い闇を隈取つて明るく見えた。

何時も早く戸を閉める長い縁側にも人の影が往來して、庭樹の葉裏に座敷の燈光が流るゝやうに射し渡つた。今少し前、嫁の道具が着いて、簞笥やら鏡臺やら行李やらを、人々が寄つてたかつて奥の座敷に運んだが、それも済んで、今は嫁の君の一行を待つばかり。

蛙の聲が断絶なしに聞える。暖かい濕っぽい空氣はしつとりとして、葉を出し初めた芭蕉の夜風に戦ぐ音がをり／＼四邊に響く。

高窓に接した勝手元では、今宵の料理の準備に忙しいと見えて、膳碗を扱ふ音、物の落つる音、流元の水の音、けた／＼ましい笑聲も時々起つた。今し大丸醬に結つた家婢は、大和障子を明けて、兩手に桶を提げて、柴垣に添つた細い路を、前の井戸端へと水汲に出たが、不圖氣が附くと、其傍に今から半年ほど前、此家に周旋して呉れた老母の嫁に當る四十恰好の女が立つて居た。

「まア、吃驚した。誰かと思ひましたよ。」

女は手で制して、小聲で、

「たうとうかういふことになつて、お鐵さんには本當に御氣

の毒……」

『いゝえ、私なんか……』

『でもねえ、難かしい家ですからねえ、却つて好かつたかも知れない。』

『いゝえ……』

『叔母があゝだから、本當に困るよ。今度の嫁さんだつて、また屹度酷められるにきまつて居るからね。』

お鐵は此女が此處に周旋して呉れる時、口を極めて其主人の温情、家庭の平和を説いたことを思出した。

『鎌さんは善い人だがねえ。』

『えゝゝゝ、旦那様は本當によく物の解つたお方、……でなけりや、私などはもうとうに何處かに行つて居りました。お駒さん、私は随分酷いと思つて、口惜しくツて泣いたこともありますからねえ、あなたの叔母様ですけれど、御年寄は本當に酷い方ねえ、何ぼ私だつて押附嫁に來た譯ぢやありませんし……それやあこんな至らぬものでも、旦那様の御氣に叶へば……と思つたばかりですもの。』

『左様ともねえ、本當に。』

『ですのに、鳥渡でも旦那様と話でも爲て居ようものなら、それや大變。怖い眼で睨まれて、色々なことを言はれて、旦那様にまでそれは酷く當るんですから。』と言懸けて、『旦那様は本當に御可哀相……』

大丸髻に結つて、自分から家婢の積りではなく、いろ／＼心から世話をして遣つたことを思出した。小さい時天然痘に罹つて鏡を見る氣にはなれぬ痘面、それを氣恥しくもなく、紅やら白粉やらを塗りつけたことをも思出した。女は容色が悪くては、どんなに正しい心を抱いて居ても振向くものも無いのかと思ふと悲しくもなる。

少時して、『私、本當に、今度は好いお嫁さんが來ればいゝと思つて居ますよ。お話を伺ふと旦那様は随分不仕合せな方ですものねえ。』

『本當ですよ。學問が出來て、何一つ知らぬことは無くつて、親孝行で、優しくつて、それは好い人なんですから。』

『本當にねえ。』

提灯の火が坂の上に見えた。お嫁さんではないかと思つたが、さうではなかつた。

『お嫁さんを見たことはないの?』とお駒は訊く。

『えゝゝゝ、此間ね、お隣で見合をするツて言ふ時、何うかして見て遣りませうと思つて、それは骨を折つたけれど、後姿を鳥渡見たきり。』

『何んな女?』

『背のすらりとした、絲織の鐵がかつた衣服を着て居ましたよ。』

『お隣の奥さんの友達ですツてね。』

『え、國でお針と一緒に رفتたお友達ですッて。前の亭主は船乗で、始中終家に居つたためしが無く、偶に歸つて來ると、新潟の女はどうだの、長崎の女はどうだのッて、そんなことばかり言つてゐるんですッて。道樂者には懲々したから、何んな苦勞でもするから、しつかりした亭主を持ちたいと……』

『お鐵さん、お鐵さん！』

と呼ぶ聲がする。

『お母さん！ 何處に行つてゐるの？』と續いて、若々しい聲がして、今年十六になるお駒の娘が其姿を半ば勝手口から現はした。

『二人は何してるんだらう、此忙しいのに……』といふ聲が戸内です。

『はい／＼今行きますよ。』

戸内に入ると、勝手は戦場のやうに混雜して居る。仕出屋の料理、さしみ皿、吸物椀、お平、栗のきんとん、酒樽が傍に轉がつて居るかと思ふと、七輪には鍋が湯氣を白く立てて煮えくり返つて居る。引物の青い簾には大きい蛤と鯉節が入れられてあつて、茶の間では、花婿の主人が平生の衣服で、車夫にやる祝儀を一生懸命に半紙に包んで居た。

羽織袴の銑之助が其處へ遣つて來て、

『兄さん、そんな事は誰かに遣らしたら好いちやないか、も

う來るよ、早く衣服を着替へないと……』

『うん、よしよし。』

と言ひながら頻りにそれを遣つて居る。

『本當にサ、早く。』

『うん、よし。』

媒妁役の隣の主人が同じ、羽織袴で遣つて來てまた促し立てた。で、主人はそれを親戚の男に頼んで座敷に行く。其處には羽織袴、着物、羽織の紐、白足袋などが整然と揃へてあつた。前の細君と結婚した時も此羽織に此袴に此衣服であつた。斜子の羽織の紋は黄く汚れ、仙臺平の袴にも處々汚點が附いてゐる。お駒が來て、手傳つて襟の工合などを見て遣つた。

座敷のさまがまた面白かつた。床の間の八疊には、紅入メリンス、黄八丈だの近所から借集めた座蒲團が不揃に並んで、煙草盆と火鉢とが打交ぜに置いてある。嫁の簞笥は新しく、鏡臺の鏡は光つて、ニッケル臺の空氣洋燈は眩いほど室内を照して、今少し前まで不治の病氣に罹つた母親が寢て居たとは思へぬ位明るかつた。銑之助の結婚の時には母親は床を疊んで、三男の士官學校卒業式の時に拵へた紋附を着て、晴々しい顔色をして席に列つたが、今は長く座に堪へぬので、一時其寢床を四疊半の離座敷に移したのであつた。茶の間の八疊は、古文書の銅版を貼つた二雙屏風と古い先祖傳來の四疊

屏風で中央を旨く仕切つて、陰に長火鉢やら料理やら膳碗やらを混雜と置いた。玄關の三疊から此八疊を経て客間に通るやうにしてあるのである。

銑之助が別居してから、離座敷の四疊半は、其儘主人の書齋となつたが、青年空想家の曾て住んだ名残として、ダンテの肖像とハイネの肖像とが壁に張られたまゝ黒く汚れて、薄暗い洋燈の光を受けて居る。寢床の上に母親は坐つて居た。病みついてから體は愈々瘦せ、顔は暗い一種の影を帯びて、嶮しい表情は更に一層際立つて見える。其傍に一人の實直らしい老人が居た。これは老母の義弟であつた。

『嫁取と謂ふものは手數なもので……』と老人が言ふと、

『本當ですよ。かう幾度も嫁を貰つては、大抵な身代でも堪りつこはありはしません。』

『今度は好いのが欲しいもんだが……』

『本當ですよ……』

少時黙つて居る。

『此頃は腹の痛みは?』

『少しは好いやうですけれど……好いが好いにならんで困ります。』

『好い醫者にかゝつて見なすつたら如何です?』

『嫁もさう言ひますがな。何うせ、もう世話ばかり焼かし居るんですから。』

『そんな事は無い。姉さんなぞこれから少し樂をしなれば……』

坂の上に何となく騒がしい氣勢がする。それ! と出て見ると、提灯の光が彼方此方と賑かに動いて、がら／＼と車が五臺、其内の一臺は幌が懸けてあつた。

羽織袴の兄弟に護られて、嫁は入口から玄關に上つた。仕切の障子が外されてあるので、二間續きの座敷は明かに見渡される。銑之助と銑之助の嫁とお駒の娘と家婢のお鐵とは、庭に向いて明いた縁側に竝んで立つて居たが、屏風に添つて其嫁の一行の通る時、髪を丸髷に結つた白襟黒紋附の、低頭勝の背の高い姿を誰も皆見た。

嫁の一行は座敷に通る。一番上座に嫁が坐つて、續いて先方の兄と弟とが媒妁役の隣の主人に挨拶して座に就く。花婿はかういふ儀式には馴れ切つた沈着いた態度で、一通の挨拶がすむと、緩い優しい柔かな語調で、顔には絶えず微笑を含みながら、靜かに世の常の會話の緒を開いた。嫁の眩しさに低頭して居るのを、媒妁役の隣の主人が見て、平生遠慮なしに戯談を言合つたことなどを思出して、其生真面目なのが吹出して笑ひたい程可笑しかつたが、ふと振返ると襖の一枚あいた處から、幾箇となく重りあつた顔!

隣の主人は立上つて、襖の外に出て、

『障子の穴から見るものですよ……障子の穴から。』